

笹森 猛正（ささもり・たけまさ）

1、プロフィール

詩誌「鴉」「北」(第2次)に拠った詩人、翻訳家、外語(仏文学)教師。学習院大学、麗澤大学その他教授。豊富な語学力で英仏の詩を逸早く郷土に紹介、自らも詩を作った。

<生没>

1905(明治 38)年2月1日～1990(平成2)年7月 10 日

<代表作>

詩集『ギタアル』(私家版)

翻訳チボーデ『ボードレール論』ポーヴォワール『招かれた女』等

<青森との関わり>

弘前市出身。1926(大正 15)年弘前高等学校卒。黒石の高等女学校等で英語教師として教鞭をとる。

2、作家解説

笹森の遺した業績としては、おもに詩作、英仏の文学作品の翻訳、大学での外国文学教育等が挙げられるが、その中でもやはり郷土の詩壇において、イエーツ、ベルレーヌ、サマン等の英仏の詩を鋭利な語学力を以て他に先がけて翻訳、発表したことと、それら詩人の影響色濃い詩作品を彼独自の感性で結晶させたことが特筆されるべきであろう。

高校卒業後の大正末～昭和初期にかけ、黒石実科高等女学校で教鞭をとりながら、弘前市の詩人佐々木繁が発刊した『鴉』に自作の詩や英仏の詩人の作品を翻訳、発表。『ギタアル』(1932 年刊)は『鴉』誌上に掲載された作品を中心にまとめられた著者手製の詩集であるが、豊富な語学力を背景に、優雅で高尚な言葉を洗練されたフォルムの中に散りばめた彼の詩は、郷土の同時代の詩壇にとって先駆的な意味を持つものであったと想像される。

「窓の下／水罫(フラスク)の蔭(カ)影(ゲ)／さくらんぼの匂／白い手のひらの空の色／／風は静かにしだれ柳の枝を揺ぶり／女は青い絵のなかで六絃琴を弾きつづける……」(「初夏」1924年)「白嬢(ブランシュ)の鳶いろの腰は／どのひらひらするスカートよりも／魅惑(シャルマン)だ」(「春」1929年)『ギタアル』以後も1933(昭和8)年刊の第2次『北』や後の『府』らにも同人として名を連ね、詩を発表。詩風は次第に先の抒情的なものから、自らの来歴を見つめ、博学的な語彙の中にも生と死を主題とした哲学風なものに変化していった。

「山は白い、ギリシアの神殿のやうに、夜ごと僕の占めるラムプの座席のやうに。／／僕はしかし海のことを考へてみた、幾万年このかた僕の軀(からだ)に密閉され、僕のなかに冷たく澱んでゐる蒼い海のことを。／／(三葉虫の1匹だつた僕)／／僕は輪投げの輪の中に白い山と蒼い海をいつしよにつかまへた。」(「唄」I 1933年)彼の詩作はこの時期のほぼ10年間程と見られ、その後は外国文学研究者としての道を歩んだ。

黒石での教師生活は東大入学の学資を得るためであり、東大では仏文学を専攻、卒業後も2度渡仏するなど研鑽を積み、帰国後は学習院大等で教壇に立った。

3、資料紹介

○『ギタアル』

図書

1932(昭和7)年7月

788mm×1091mm(四六判)

著者により印刷(謄写版)。イエーツ、ベルレーヌ、サマン、メーテルリンクの訳詩と自作詩25篇を収める。

「雨上りの銀杏の梢に黄金(きん)の陽ざしがこぼれ、その上でこともなく閑古鳥が唄つてゐる」(「追憶」部分)(参考文献;船水清編『青森県詩集』上、北方新社)